

現地会議 in 東北 報告書

作成：NPO 法人いわて連携復興センター／東日本大震災支援全国ネットワーク岩手担当

【はじめに】

東日本大震災から 7 年が経過し、復興への状況は岩手・宮城・福島でもそれぞれのかたちが見え始め、各地で状況は個別化且つ複雑化さらには深刻化の様相を呈しています。加えて言えば、長期化する復興に向け、課題を共有し、解決策を探る場と課題を県内外問わず発信するオープン型の「現地会議」を開催し、復興に取り組む様々な担い手が連携した課題解決につなげる必要があります。もちろん、岩手・宮城・福島の各県内でだけでなく、県域を超えて課題と取り組みを共有することも今後の広域連携とつながりづくりのためには重要であると考え、本会を企画及び実施いたしました。

【タイトル】

現地会議 in 東北 -私が東北に描く未来-

【目的】

そして今年度宮城県内において第 2 回目となる今回は、3 県に共通して大きなキーワードとなっている「次世代」というテーマに着目し、現在の地域にある「課題」およびその「解決策」がいかに将来的に継続され、そしてそれを担う「人材」が今後何を目指しどう動いていくのかを共有することで、復興への取り組みを持続可能とする広域での交流促進を創出することを目的とする。

【日時】

平成 30 年 3 月 23 日（金） 13:30～16:30

【場所】

エルパーク仙台 6 階 スタジオホール
(宮城県仙台市青葉区一番町 4 丁目 11 番 1 号)



【内容】

今回の現地会議 in 東北では、各県で共通のキーワードとなっている「次世代」というテーマに着目し、3 県各地で活動に取り組んでおられる方々(スピーカー)から、それぞれが持つ「東北に描く未来 (ビジョン)」を共有していただきました。その後、スピーカーと参加者が一緒になり、グループワークを行ないました。グループ内でそれぞれの「東北に描く未来 (ビジョン)」を共有した上で、そのビジョンを達成するために「壁となる事」を話し合い、主に「ひとづくり」「なかまづくり」「しくみづくり」の 3 分野で議論を深めました。

ー以下発言要旨ー

.....

<私が東北に描く未来>

1. 下向理奈氏 (NPO 法人のんりのだ物語代表理事)

- ・ なにかやってみたいという気持ちを広げていきたいと思っている。そこに表現のあり方を考えるようになった。
- ・ 当事者として頑張っている人たちが増えている。地元の人達も頑張ろうという兆しが見えてきた。そういうものを可視化することをしていこうと思っている。
- ・ NPO だから表現できることがあるはず。そういうものを伝えたい。

2. 菊池広人氏 (NPO 法人いわて NPO-NET サポート事務局長)

- ・様々な制度、しくみが重なるところ。そういうところにいろんなことが生まれると思う。本来ははっきりしない分野や領域＝「間」が大事である。
- ・未来をしっかりと描き、課題を解決していくことが大事だと感じている。そういう思考で社会を見ること。そういうことを知る子どもたちが育っていく環境づくりが必要。
- ・滅私奉公から活私開公に。楽しく、自分らしい地域との関わり方が広がっていければと思う。
- ・未来を想定しておくことが大事。想定と違っていればそれにあわせて対応するそういう柔軟性が必要。

3. 塩田恵介氏 (只見線応援ミーティング/奥会津の地域経済を考える会事務局長)

- ・全国的にも知られている只見線。全国ローカル線の中でも乗降客が少なく、2011年の豪雨によって本当になくなる可能性が高まったことがあった。
- ・なくならないうらうと思っていたところが、なくなるかもしれないという危機感から色々なことに取り組むようになった。
- ・地域づくりのための学習支援や、若者やいろんな人たちと一緒に、自分おこし、地域おこしの講演会を継続して開催していく。

4. 霜村真康氏 (未来会議副事務局長/菩提院副住職)

- ・他地域とつながろう連携しようといってきたが、なかなかうまくいかない。だからこそ連なっていればそれでも良いのかもしれない。
- ・同じ経験をした東北で連なっていられれば良いのかもしれない。
- ・対話は続けるためにやるもの。続けるために常に問い続ける。次の間を見つけることができれば良い。間を見つけること、東北の文化として持てたら良いだろう。



5. 加藤拓馬氏 (一般社団法人まるオフィス代表理事)

- ・気仙沼のために関わる若者の活動人口を増やすことをミッションにして活動している。人口流出ではなく輩出するようにしたい。
- ・気仙沼のかっこいい大人の背中を見せること。地元の働きがいを知ってもらう。
- ・コミュニティが将来の夢をしぼるのではなく、選択肢を広げることが問われていると思う。
- ・主体性の前に自己有用感を持ってもらうこと。地元志向・未来志向の両方を持つことが大事になるだろう。

6. 渡辺一馬氏 (一般社団法人ワカツク代表理事)

- ・つくりたい未来＝困ったことがあっても困らない東北。
- ・デビューする人を増やすための環境づくり。若者が育つ、バッテリーボックスづくりをしていると思っている。地元の企業、NPOに、しっかり空振り三振する機会をつくる。
- ・自分たちで課題解決ができるしくみをつくりたい。

【参加者数】

20 団体 31 名

【グループワークでの議論】

▼ひとづくり

背景：元々持っているコミュニティの機能によって、地域を維持してきた。その機能が夢をあきらめさせている装置となっている。

- ・担い手の育成
それぞれに合った役割、適材適所
マニュアル化
- ・意識改革
「人がいなくなってもよい」というような意識改革
人材流出を産むような大人の意識改革
ジブンゴト化、一緒にやろうという機運を高める。

▼なかまづくり

背景：災害対応のわかりやすいビジョンが、長期の活動になると、わかりにくく伝わりづらい状況がある。

- ・地域住民、外部人材の巻き込み
- ・地域、自治体、NPO 等のつながり・連携
立場や状況を超えての相互理解
知らない人に知ってもらう機会の必要性
信頼関係の構築、地域から必要とされる NPO に

▼しくみづくり

背景：これまでリスク度外視で活動してきたが、保険や制度などの裏付けが必要になってきた。

- ・持続性の担保
NPO の政策づくりへの参画
- ・多様な働き方
兼業可能(シェアリング)
半農半 X、半漁半 X などへの兆し

【所感】

▼岩手・宮城・福島の 3 県各地で活動に取り組んでおられる方々から、それぞれが持つ「私が東北に描く未来」というビジョンを共有して頂き、そのビジョンを達成するために必要なことを多角的にあぶりだすことができた。



▼人口減少社会の中で、地域が地域であり続け、そこで人が暮らしていくためには、社会の変化への対応力や価値を生む力を育み、自分たちで課題解決が出来るしくみづくりや、自分らしい地域との関わり方が大切である。また、その事を 3 県で共有し、交流の場を設けたことで、復興への取り組みを持続可能とする広域での交流促進の創出に寄与することができた。

▼地域で活動している中で、自分の思い描く未来を考えること、カタチにしていくことがなにより大事であり、引き続き「つながる」「続く」「受け継げる」ことを意識して取り組んでいきたいと思う。

【県外への発信】

〈中継配信〉：Facebook ライブ動画によるインターネット中継配信を実施。アカウントは東日本大震災支援全国ネットワークを使用。再生数は 559 回、シェア 5 件、「いいね」38 件、コメント 6 件。

〈JCN メインメーリングリストによる配信〉：3/28、登壇者発言要旨を配信。

〈JCN レポート〉：次号掲載予定。

〈JCNweb サイト〉：http://www.jpn-civil.net/2014/activity/genchi_kaigi/180323_tohoku.html

【運営】

主催：東日本大震災支援全国ネットワーク（JCN）

協力：みやぎ広域支援団体連携担当者会議（みこし連）

